

きびしい緊張感のあるみかしほ学園
自ら学ぶ力と、学ぶことを喜ぶ学生
清潔な美しい環境、他者を敬愛する心
大きな希望と先見性のある学生
実践する力と根気強さのある学生

みかしほ

MIKASHIHO GAKUEN

2009/9 No.542

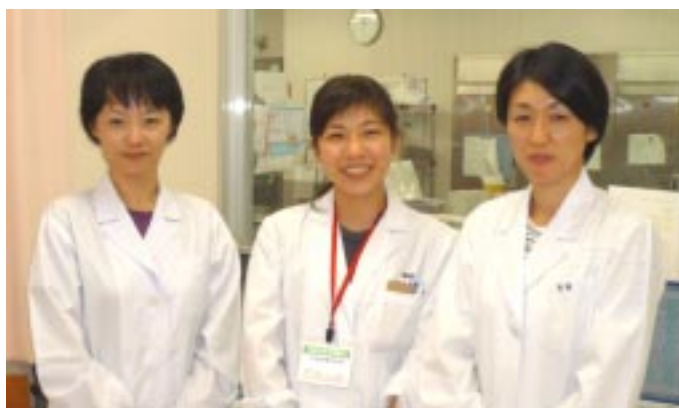
発行者 学校法人みかしほ学園
印刷者 みかしほ学園
発行所 学校法人みかしほ学園
姫路市東延末2-165
TEL(079)288-2600

定価 150円

ただ今 学外実習中

栄養士科2年生は、夏季休暇中に、給食管理実習の一環としての学外実習に出ています。

実習期間中は、はじめての環境に「緊張」と「驚き」の連続です。しかし、また「喜び」もつまれます。これまでにない貴重な経験をしています。そして何よりも、みんな「一生懸命」に頑張っています。暑い中でも、意欲的に、一つでも多くのことを学んできて下さい。



研修中の坪根さん(中央)

みかしほ祭

とき: 11月22日(日曜日)

ところ: みかしほ学園1号館・5号館
(日本調理製菓専門学校)

日頃の学習の成果を発表する絶好の機会。「みかしほ祭」は、11月22日に開催されます。その中心となるのは、創作料理・創作菓子展示です。展示する作品は卒業規定単位のひとつです。作品制作に困らないように早くから構想を立て、自分が納得できるものに仕上げましょう。期日が迫ってくると焦りが出てくるものです。余裕のある計画が必要です。皆さんがんばって「みかしほ祭」を成功させましょう。



作品展示会場

~~~~~ 今年の「みかしほ祭」から ~~~~~



栄養研究発表コーナー

### 就職活動は

### 進んでいますか

日本調理製菓専門学校  
教務部 森田 弘志

今、社会ではニートやフリーターの増加が大きな問題になっています。また、そこから抜け出し、定職に就こうとするのですが、なかなか仕事を見つめることができません。先日、そのような人達の姿のあるテレビ番組が映し出していました。その番組を見て思った事は、まず、学校を卒業して社会に出る時にしっかりとした仕事を持つということだと思います。また、知識や技術・教養・マナーを身につけておかなくてはならないということなんです。でないと、取り返しのつかない事になります。何年間も定職に就かずにダラダラとしていては、それから頑張ろうと思っても、チャンスが与えられないのです。皆さんの年齢はさまざまですが、同じスタートラインに立つ学生です。卒業時に社会人として活躍するためには、今、真剣に就職活動に

### 少しずつ積み重ねよう

日本調理製菓専門学校  
教務部 酒井 宏純

前期の実技授業では何度も基本動作を練習し、自信のない学生は、放課後残ってまでも練習をしていました。また、夏休み

### 9月からの予定

9月28~30日  
栄養三者懇談

11月22日  
みかしほグルメ祭

取り組んでおかないと一生後悔する事になります。今、この一年、二年が一生を決めると言っても過言ではないのです。頑張ってください。

実技もやはりそれと同じことがいえると思います。ペーパー試験のようにはいかないのです。たとえば日本料理の桂むきひとつとってみても毎日大根を一本ずつ練習したものと、試験の二週間前に大根二本ずつ練習するのでは、毎日一本ずつ練習した方がうまく桂むきできますし、毎日包丁を持って料理を作っている者とたまにしか持たない者とも差が出てきます。放課後も家で少しずつ練習を積み重ねて技術は体得していくものです。

# 目が合えば 笑顔でおはようございます

みかしほ学園では、「挨拶の励行」を掲げていますが、やはり難しいものです。そこで、神戸新聞の「随想」に挨拶についての一文が掲載されていましたので、紹介します。ぜひ一読して下さい。

日本の博物館としては珍しい施設を利用して、他の企業博物館や他社の人事担当者から、コンパニオンや女子社員の研修を依頼されることが多い。

その施設とは、接客研修のための設備。約八十平方メートルの小部屋だが、壁は一面、鏡張り、床は木製フローリング。あたかもエアロビクス訓練室かと見まがうほどのもの。

短期研修は、姿勢、発声発音、歩き方、身のこなし、敬語などの基本を。長期のものは、コーヒーマシンの操作、応用動作まで。

いずれの場合も、事前に「挨拶」について説明する。研修の目的は、とりあえず「挨拶」を完璧に行うことが、接客の第一歩と教える。

そこで「挨拶ができますか」「これからは、努めて挨拶しますか」と問うと、全員がうなずくので、

「挨拶」についてよもやま話をする。

挨拶は、人の心を開く大切な要素であることを、失敗例をあげて説明すると、全員がゲラゲラ笑って聞いている。

つづいて「挨拶」の仕方について基本的に必ず実行されなければならないことを述べる。

あいさつの「あ」は、明るい大きな声をだすこと。これがなかなかできないのだ。オクターブをあげて、腹からの声をだすため、かなり練習を要する。しかしすぐに上達するだろう。

あいさつの「い」は、いつも笑顔である。明るい人は、笑顔が自然とでるが、暗い人は、努力を要する。つねに、心を豊かに楽しくしていないと、どうにもならないもの。訓練次第。

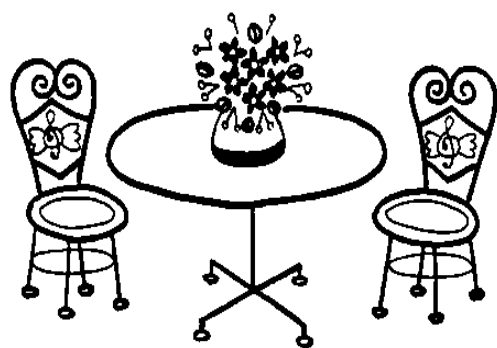
あいさつの「さ」は、人より先に**客**から先に挨拶される

と落第。顔をあわせたら直ちに、客より先に挨拶すること。本人の強い意志をともなう。

あいさつの「つ」は、つづけて添える。これが一番難しい。挨拶に、目を添え、笑顔を添え、心を添え、言葉を添え、おじぎを添えるのだ。これは簡単に実行できない。場数を踏むのみ。

「挨拶は簡単、すぐできます」といった人達が、このあたりから悩みだす。人間関係の潤滑油として働く「あいさつ」は難しい。

神戸新聞より引用



## 「はたらく」ということ

ギリシャ神話によると、パンドラが主神ゼウスからもらった禁断の箱（壺ともいう）を開けると、その中から貪欲、中傷、虚栄、労苦などの諸悪が飛び出してきた。あわてて蓋を閉めたところ希望が箱の中に残ったという話がある。

その諸悪の一つである労苦は苦心、骨折りという意味を持ち、日本語で対応する言葉として「労働」が当てられるが、この熟語は比較的新しく、伝統的な物は「仕事」ではないかと思う。

日本は農耕社会であって、籾を蒔き、苗を育て、田植えをし、施肥を行い、除草をし、その生育を助け、収穫する。これは農民の仕事であって、日々稲の生育を自分の目で確かめ、自己の努力が報われる過程を楽しむことができる。これらの農民の努力は皆みそのもので、衣食住を含む生活の一部をなすものである。

この「労働」と「仕事」の概念的な相異は、欧米からの日本人の働きすぎ非難に結びつくとともに、東西両

社会に人生における「労働」の位置づけに大いにかかわっている。

登山家として高名な初代南極越冬隊長の西堀栄三郎博士が「山に登る場合、登山家とシエルパは同じくらいの重量の荷物を背負うが、その取り組み方や気持ちの持ち方において圧倒的な差異がある。



登山家は登頂という希望を達成するために（いわば楽しみのため）に、シエルパは一種の義務として登るという意識が大きい」ということを言われたことがあった。私の人生において「はたらく」という行為は、登山家の登山にあたるのか、シエルパの義務の履行にあたるのか。労働という概念に関して、そして人生そのものについて考えさせられるのである。

神戸新聞「随想」より